

総合農業技術センター試験研究課題事後評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：野菜の作期拡大技術の確立（H23～25）

小課題名：平坦地における冬期を中心とした省力品目の作期拡大技術の確立（H23～25）

担当者名：赤池 一彦、中村 知聖

評価項目	評価点	指摘事項
1 研究目標の達成度	5 / 5	安定生産が困難な冬期を中心に、コマツナ、レタス、インゲン、カボチャ等多くの作物の栽培技術が開発され、研究目標の達成度は高い。
2 成果の有用性 （普及性、波及性）	4 / 5	各作物について、トンネル栽培・無加温ハウス栽培の具体的な技術、さらに被覆資材の材質も提示されており、普及性は高いと思われる。
3 研究の発展性	4 / 5	直売所への野菜の供給は高齢者が多くなっており、省力・簡易な栽培技術が望まれる。他の品目・品種についても検討してほしい。
4 研究課題選定の妥当性	5 / 5	県内の冬期の野菜生産量が少なく需要が見込まれることから、冬期を中心に作期を拡大するという研究課題の選定は妥当である。
総合評価	4 / 5	それぞれの作物について有望な品種が選定され、具体的な栽培技術が提示された。これらの成果は農家の冬期での収入確保が期待でき、高く評価できる。また、県内の産地では作目が固定化されているので、さらに新しい作目・作型を開発してほしい。その際、直売所で売れる品目を的確に選定することが重要である。

「注」 評価点の目安

評価	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
点数	5	4	3	2	1

試験研究機関の処置

本課題の後継課題として、冬どりキャベツ、ニンジンの新作型開発に取り組む予定である。今後も、直売所向けとなる簡易で省力的な品目について技術開発を継続していきたい。

総合農業技術センター試験研究課題事後評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：野菜の作期拡大技術の確立（H23～25）

小課題名：高標高地におけるスイートコーンと葉物野菜の組み合わせによる新規作型の確立（H23～25）

担当者名：渡辺 淳、長坂 克彦

評価項目	評価点	指摘事項
1 研究目標の達成度	5 / 5	基幹品目であるスイートコーンの前作、後作として葉物野菜を組み合わせた連続栽培技術が開発され、研究目標の達成度は高い。
2 成果の有用性 （普及性、波及性）	5 / 5	本研究で提示された3作モデル作型及び3作1回施肥法は、省力・低コスト化の観点も十分に考慮しており、普及性は高い。
3 研究の発展性	4 / 5	本研究も野菜の作期拡大に大きく貢献する課題であり、高齢化する農家のため、省力の観点からさらに研究を継続してほしい。
4 研究課題選定の妥当性	5 / 5	スイートコーンが基幹品目である地域において、土地生産性向上のための作付体型を開発する研究課題の選定は妥当である。
総合評価	5 / 5	地域の土地利用率が向上し、作物の栽培・出荷期間を拡大でき、現場ニーズに合った課題である。また、同一マルチの使用による栽培体型・3作1回施肥は省力・低コスト化の観点から魅力的である。普及センター等の協力を得て、さらに現地実証を重ね、農家への普及・定着を図ってほしい。

「注」 評価点の目安

評価	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
点数	5	4	3	2	1

試験研究機関の処置

普及センターの協力を得て富士山野菜生産協議会の中に3作に取り組む研究会を立ち上げ、この中で技術の実用性、発展性について検討していく予定である。今後も、現地実証を重ねる中で省力化にも取り組み、農家への普及・定着を図る。

総合農業技術センター試験・研究課題事後評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：野菜・花きのオリジナル品種育成と栽培技術の確立（S60～）

小課題名：小型コチョウランの新品種育成と栽培技術（H18～25）

担当者名：窪田 浩一、深澤 絢

評価項目	評価点	指摘事項
1 研究目標の達成度	3 / 5	3品種を選抜し、品種登録した。研究期間内ではさらなる品種育成には至らなかったが、研究目標はある程度達成されたと考えられる。
2 成果の有用性 （普及性、波及性）	2 / 5	品種登録された3品種についてはある程度の有用性が認められるが、栽培特性について見れば、普及性が高いとは言い難い。
3 研究の発展性	2 / 5	交配及び重イオンビーム照射による突然変異誘導についても、良好な結果は得られなかったため、研究の発展性は高いとは言い難い。
4 研究課題選定の妥当性	4 / 5	研究開始時、生産者から生育の早い小型コチョウランのオリジナル品種育成が求められており、研究課題選定の妥当性は認められる。
総合評価	3 / 5	90%以上の農家が台湾等からの輸入苗を使用しており、この状況を打破する画期的な品種が開発されない現状において、さらに研究を継続するのは無理がある。本研究を終了するとの判断は妥当である。ただし、長期間にわたる研究過程で得られたデータ・技術等については、今後の研究に有効に役立ててほしい。

「注」 評価点の目安

評価	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
点数	5	4	3	2	1

試験研究機関の処置

試験期間の中で得られた基礎的な知見を、ピラミッドアジサイ等、今後の花き類の品種育成に活用する。また、品種登録した小型コチョウラン品種については、普及部門と連携しながら現地での栽培支援を行う。

総合農業技術センター試験研究課題事後評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：鉢花・花壇苗類の生育阻害要因の究明と対策技術（H23～25）

小課題名： 1．アッサムニオイザクラ異常葉等の原因究明と対策（H23～25）

2．ビオラ萎凋・異常葉の原因究明と対策（H23～25）

3．シクラメン萎凋症の原因究明と対策（H22～25）

担当者名：渡辺 淳、舟久保 太一、國友 義博、横内 京子、山崎 修平

評価項目	評価点	指摘事項
1 研究目標の達成度	4 / 5	現地で問題となっている各種花きの生育阻害の要因が解明され、対策がとられつつあり、研究目標はある程度達成された。
2 成果の有用性 (普及性、波及性)	4 / 5	アッサムニオイザクラとシクラメンについては、新病害であることが明確にされた。これらの成果は有効な対策をとる上で有用である。
3 研究の発展性	4 / 5	様々な観点から問題がクリアーにされつつある。これら花きの安定生産を図るために、今後も研究を継続してほしい。
4 研究課題選定の妥当性	4 / 5	基幹品目であるこれら花きの生育阻害要因を解明し、その対策技術を開発するという研究課題の選定は妥当である。
総合評価	4 / 5	アッサムニオイザクラの市場シェアは全国1位、ビオラとシクラメンについても全国有数の産地である。これら産地の競争力を維持・強化するためには、様々な生育阻害を克服し安定生産を図ることが必要であり、重要な研究課題である。普及センターや生産者と密に連携し、対策を進めてほしい。また、成果のスピーディーな公開・普及が必要である。

「注」 評価点の目安

評価	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
点数	5	4	3	2	1

試験研究機関の処置

今後も現地で発生する栽培上の問題解決に取り組む。得られた成果については迅速に公開して普及を図り、花きの安定生産に努める。

総合農業技術センター試験研究課題事後評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：原油・資材費高騰に対応した低コスト生産技術の確立（H22～25）

小課題名：リン酸、加里の施肥効果を高める肥培管理技術の確立（H22～25）

担当者名：長坂 克彦、望月 久美子

評価項目	評価点	指摘事項
1 研究目標の達成度	5 / 5	L型肥料の開発と減肥効果の実証、局所施肥技術の開発、省力・施肥量低減型作付け体型の開発など、研究目標の達成度は高い。
2 成果の有用性 （普及性、波及性）	5 / 5	いずれも実用的な技術であり、成果の普及性は高い。そのためには、生産者が納得し安心して実施できるよう資料をそろえて欲しい。
3 研究の発展性	4 / 5	本研究期間で扱わなかった作物について、また作物の品質の観点についても範囲を広げ、より体系的な技術開発を目指してはどうか。
4 研究課題選定の妥当性	5 / 5	肥料価格が高騰し、農地にリン酸・加里が蓄積する状況で、土壤診断値に基づき施肥効率の向上を図る研究課題の選定は妥当である。
総合評価	5 / 5	試作したL型肥料の実用性の実証、マルチ内施肥による施肥量削減、2作1回施肥法による省力化、さらに適正なリン酸施肥量・減肥可能期間を提示するなど多くの実用的な技術が開発され、これらの成果は高く評価できる。これらの技術は経費節減・土壤改良にも繋がり、今後のさらなる成果を期待する。

「注」 評価点の目安

評価	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
点数	5	4	3	2	1

試験研究機関の処置

普及センターと連携を図り、栽培マニュアル等の資料を整備して成果が迅速に現場へ普及するよう努める。また、本課題で扱った品目以外についても、収量・品質の維持に必要な施肥量を明らかにする。今後も体系的な施肥量低減技術の開発を進め、肥料コスト削減や環境保全型農業の推進を図る。